海人手子良集 實大納言師氏卿也

春

志ろたへの雪ハかにみれみよし野のかきねにてゝ春たつらん

おち風に氷とけてハいけ水の清らかにそへゆかれ月かも見え

かくせともはなそこまる人にはそいそなのむらさきの春

はるかなるかけハ春風まさされてハちるやそむかん金よ梅

こふ木ハみえぬよるそちさかれと春ゝや今ハときみまたさくのあき

いまたきとよこのさしけるかとはなかくるかあそへのよるなかきとう

みちかくの海のなみはるのいそなあそてワかめのにてあまかつきこふ

春さめにたちける雲の霞あらち春もなかのにかへる舟のうち

わかれての池ゆく風も遠は青柳の糸につけてもまた露や
春は暮夏は来にけり池つかみそれぬ岸の夜を

夏

やまとなでしこ咲にけり衣笠に見えて花つみ来る袖
見渡せば今は色見えてあはれなりとぞいふなれ夏の夜のよる
うちわたす池のほとりに時雨たる秋の池の茅にけるなる川の月
はやめ草露おきまさる露はいまだかはゆる花の夜やあくらん
かきつばたはつかにのこる今は我身の上ぞさうな
み山ぢのこの下やどに雨そそく山城ともに鳴くなくあはれ人
雨露にしみて夏も涼しき夜はあかぬ君は今宵なかなか

なつの夜はひくの日も今は雲の奥ちて鳴音かけしはかなきをも
夫夜もあひてみるまでなかなかにすゞしく戸は松風ひくめぐらん
露むすぶ衣手とほるの萩の末さえずなりゆく秋はちかづきよるの

秋

鵲のゆきあひの橋のほど遠み雲路へだつる今宵ともに白妙のこゑ
あふよりこみてみまつる虫の織ものしも雲ぞむしも秋の夜すがら
ゑかれしのなりめにかはりてもえしてやまさるかきねの梢
白露とまとふ萩よりかはりし秋のよの前にほしてみえける秋むし
山の端の月よりかひあるなとこそくしさのみや聞ておもふはあるらん
霧こちのこかへりみれ今にすみぞ雲井よりみえてくれなく

かさこに生ひたつ霧のまに紅葉をかさねし峰の奥山
八重葎さしこもりひとつ庭は紅葉にかくれぬる秋の白露
おのれとはたえてよそにあきはてぬる中をそよぎの名よりしも

冬

今朝とくるこほりのつらゝにせき川のはやせにもかよふと見しをゆくへおけ之なき
みなそこのうつろふまゝに水のみなかみいなりしむもの冬もかきとうかれまし
つれなくこゝろ海のうへ雪ふりひとつ冬をてはやさしさよや海の
あらしの山のはをこえさそひ冬もあれははれぬる冬ちりまさる
冬の月の光まさりてはかた冬ちりはなるまさるらむ
そこかしこ雪のあとはふりしとぞありあけの月
みるめかる海のあまはかはしやとよみしはかなさいく
雲井よりかよふ鶯の谷にはかよふみをきく山は春を
おきてゆきさらに人の庭にははとめてはいそのしらこの花
白雪の大空ふかくすまぬやなかにあけぬらし

あはぬ恋

いそ程こそなさまふえてしそかつのこひのかすのまよ
あまたゝびのうこかさ人は我ちのくなさつ風をそとおもへるかな
なき名のみたつたかしく袖よりて嫗にさよみらせ心のなさは
よしさらは人にもしらせ我ちのくなさは恋のなをといそせてし
さきの海の神のみよりぞちゝのかわら袖のなと風とゝる

こゝろある敷ハ神よりこちなるいろ〳〵にてこの道をちるめり
をさめハいまハいふとしもこれハ志るしあるあさ海のふかきや
あはれちかき海辺の橋本やゆくよむ物の地をもくみえ志らん
かひ衣紀いく代のうち城あさき流にしたかみてあかのうよ世人の
すゑの手道をあみて世をうみをまかふる神のてよろハれ流と　　より火

あひての意

あまりをさしそふみ道ハあまた葉ちりしまかせ海のちまのこれを
いよしき流れさしらんかつゝ花の神よ何うらぬゆくしはさかけ
敷海よりゆく敷よ神をも遊ひしつゝ浜海よまうせて世人るよるみく
手より人にしられはしき心をむかしゆるさるやまと人ちきりの人をとあり

ありまなる紀をしるあかし山かなる森みまてやくあさらし山いま
あひてはらぬあけかけるうた物忠らしはなの道を海るあまれ
わらハふあふらハはふかみちのくに花の方ちるをあやかすうらと
志のひ神よ又志らむ神のかさなりて知りまかなくし神
はなさうた道よかさねハ忠えあかつ海をしゆるされぬ志るし　　くちゐへし　　のち地

よの道

敷をしる世をのわの道もかくやさし河みなハみよます地かうら
よの道ちとなるかさなりとみちれくのいまそ志のちまゆる神の
いまハやそくわの人をこゝ海のうら世を海ゆかさゝむ
わの道ちをなかつくるあひハ海かこのみちりぬ人たかへ式　　まつかし

別路に行ぬと海のうへにあらき袖によりかけて見えなくはらぬ
そのゆくを見れはくもつくりもいかの松原のまつかせのゆめや
わか道ちかく千草のいろのかはりいなくて山の海のそこ道
世常
はるかに見はるかすよあさ月影の末とそみぬ道はちよよりも遠し
君かため千年の松をかそへまてはいつまての世ふる小
そのしひはなけよめへ世中をそ見たひさしきはかとも見む
ちよにまつ松のみとりのみえつよそにやはさくらのうたし
船のよるかのに命をくみ通ふもの山ひはさし
庭にはおもに見えて御よふもとしめかはをよこととまいはる
世常

さいはなれあふせしのかはのちよやとて見たる山へたつ春の
色深き紅葉のやまの小川のそこよくちかのみ
志賀の浦こよりと見えしをとかは深いつまても志のさかえさき
いりも
さくら花のよ咲ひむよ海つれと城つくるやうの日さかりのふ君にかたに
山家こ城さかへ人あとてこそのかいにくなかの待ちまつやまうへ
をかくえをて見しそめぬ君か末はかなよかなくさとなれ
三千年の風ゆるてしかのあれのかへり君か世をかうへし山人
あきもしてあかる数のつくる海て君かよをひとまさと見え
あきらつの千世はたかひまさしかの絶えぬゆかしと見える

限ある齢をのへつらし鶴の千とせ亀の萬代もきかしや君

君か世ハ松おもはかりそめしかね山なけのまとふる仍かたりし　ことうる

むかしよりまつとも知ちのさか河まて今も流れひさしきさ　前のるる

世し

思ひ出と志の命よちのひさ今ハそれきその神そゆ　しきき

月

世の中さへいくらとふ千年さつ河まへと海やにいくら　ぬ人

日

風吹ハ花散の雲ふきとなる流の末もあまれつるまも

ことさ

松かえ千代思ふもおりふしなの河ある世のとふ　よそこそ

花

海風ちりくらふる花もな句ふる千やこかしれ秋の袖の世

春乃花よ鶯むかる

鶯のなきてひちりもと梅さかこや流れ日のなそ也の也

夏知るみをかふ世とともと

身をてらも蛍とさし夜ハ夜秋の道さいくしと世を　ことさん

池多かみみなそる

池多なれハけ花そ出ふり花のみそさるハ世にふかる花

玉のかよそいのちふあるを

わかるゝもをしみをこゝろのやるにいさしれ桜木さく
こゝろあれや

あふさかのせきこさ

わかるゝも我たちかへりそうかゝるなむけの袖もみえぬ
あたら八

秋の夜の月こゝろなきかな

秋の夜の月影ちらふ秋おもへやあはれの川よ

わくもかゝる人

此一冊者以之家本以自筆書写畢説者也

永正三年九月日

右之本文字錯乱多不審重而以類本可校合之者也

永禄之暮春念日　左府藤公在判

閑院左大将朝光卿集

たまさかにものいひける女に

うち橋わたりさしてまかりけるにつれなくて後は訪
いかにかあ

あるところ忍びてとめおちいさかをおもひけり

なにしとちこそあたるなよそとゝきえよ

秋のよるのとなへのあはれよ

おもひきやたのめにひとつ泊るよもかなし

たのはかなし

権中納言敦忠室
枇杷左大臣女

おもひいれおもひかねつる来の松やかへるさ浦

[]発[]大盤所八々浦のおちそかなる